

「フジバカマ」

廣瀬清一 事務局



以前から気になっていた植物があった。

「秋の七草」の中の一つ、フジバカマ(藤袴)。

フジバカマは、ハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、キキョウとともに「秋の七草」に挙げられている。

万葉集ではハギ142首、ススキ43首、残りの植物も複数首詠まれているが、なぜかフジバカマは大伴憶良が詠んだ1首しかない。そのため大伴憶良が遣唐使として中国に渡った際に土産としてフジバカマを持ち帰り、これを広めるためにわざわざ歌に詠んだのではないかとされている。

秋の野に 咲きたる花を指折り

かき数ふれば七種の花

萩の花 尾花葛花 撫子の

瞿麦の花 女郎花また藤袴 朝貌の花

山上憶良 万葉集 8巻 1537

(朝貌は朝顔ではなく、桔梗との説が有力)

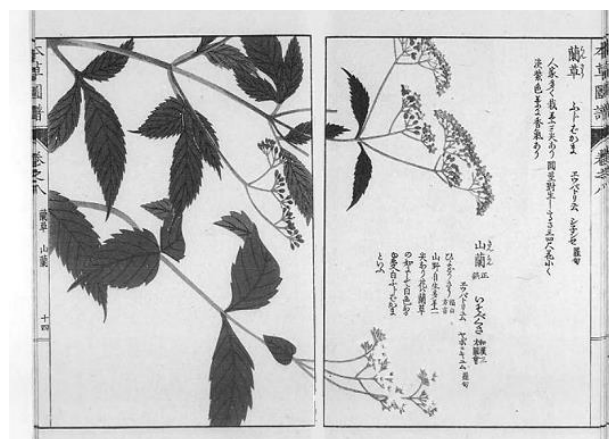
8月中旬、まだ早いかと思ったが花屋を覗いてみた。

色華やかなマム、ダリア、リンドウ、ガーベラ、ワレモコウ、トルコキキョウ、そしてユーカリ、レザーファン、アレカヤシ、モンステラなどの葉ものの脇に、さりげなくフジバカマが置かれていた。

かなり古風な名前と共に、姿はまるで秋を告げるかのように哀愁を帯びている。細い茎の先に、薄い紅紫色を帯びた小さな筒状の花を密に付ける。日本風の趣のある姿である。開花すると、細長い2本の花糸をのぞかせ可愛らしい表情を見せる。

花からは、清々しいリーフィー・グリーンでスパイシー、ウディな少し薬品臭い匂いがほのかにする。蕾の付いた枝葉を陰干しすると、次第に桜餅の葉のような心地よい甘い匂いがしてくる。

この香りについて中村会長は「香りは桜餅、飼料用の干し草、クマリンが感じられた。強くはないが、ほのかに広がり漂う快い香りだ。日本人が好きそうな香りである」とHP版 VENUS「秋の七草」で紹介している。



岩崎常正『本草図譜』蘭草 ふじばかま

国立国会図書館

平安時代になると、中国の風習を取り入れて、この乾燥した甘い香りのするフジバカマを直接髪に差し込んだり、匂い袋に入れて身に付けたり、衣類に香りに移したりして楽しんでいた。

また、フジバカマの枝葉を湯に浮かべたり、これで髪を漉いたりするという。端午の節句の日に邪気が払う「菖蒲湯」は、この「藤袴湯（蘭湯）」が始まりだという。

こうしたフジバカマの香りは、古今和歌集に藤原敏行、紀貫之、素性法師らによって広く歌に詠まれるようになる。

やどりせし人の形見か藤袴

わすれがたき香ににほひつつ

紀貫之 古今和歌集 巻第四 秋歌上 240



ところで、フジバカマと呼ばれる植物には2種類ある。一つは、園芸店や花屋でフジバカマの名で売られているフジバカマ。これは、フジバカマとサワヒヨドリとの交雑種サワフジバカマとされてきたが、最近、中国由来のコバノフジバカマ(小葉藤袴 *Eupatorium fortunei* Turcz.)ではないかと修正されている(分類学的にはまだ結論が出ていない)。

そしてもう一つは、日本に元々自生していた日本在来種のフジバカマ(*Eupatorium japonicum*)。

こちらは、生育地である河原などの環境の変化によって減少し、今ではほとんど見るができなくなっている。

こうした中、20数年前にフジバカマの原種が見つかり、岡山や京都など各地で保護・保存活動が行われている。現在、環境省レッドリスト「準絶滅危惧」に載るほどになっている。

フジバカマは関東地方以西の本州、四国、九州の河川敷などやや湿った草地に生育する多年草。同種または近縁種が朝鮮半島、中国、ベトナムなどにも分布しているようだ。

花は8月下旬～10月頃にかけて、小ぶりの先が筒状の花から、白く細い2本の花柱(雌しべ)が飛び出してくる。

和名の「藤袴」は、花が「藤色」をおび、花を逆さにした形状が「袴」を思わせることから名付けられたとされる。(花の色からするとコバノフジバカマのことかもしれない)

コバノフジバカマとフジバカマとは、形態的に少し違う。

フジバカマが高さ1.5～2mほどにもなる大型の草本である。花の色は、白からわずかに淡紅色をおびる程度。さらに、葉柄はやや長く、茎の上部などの葉は切れ込みがない葉が多い。

コバノフジバカマは高さ0.5～1m程度と葉も小さく全体に小ぶりで、花色は薄い紅紫色で、扱いや見た目からこちらのほうが花卉としては適している。

日本在来のフジバカマは、漢方(和漢薬)として使われている。

ところが、中国、中国漢方には、フジバカマの名はない。「佩蘭(ハイラン)」がフジバカマに相当するというが、学名からするとコバノフジバカマになってしまう。

フジバカマは、わからないことが多く、ますます興味がわく。コロナ禍が収束したら10月に京都の藤袴祭に行ってみよう。

参考文献

- 1) 重井薬用植物園 HP 『おかやまの植物事典』
フジバカマ、コバノフジバカマ 2017年
- 2) 服部保・山戸美智子『加古川のフジバカマ群落に関する報告』人と自然 No. 8 1997年
- 3) 宮沢三雄、亀岡弘『フジバカマ(蘭草)の精油成分』
薬学雑誌 1947-97(1) 120-122、1997年
- 4) 樋口百合子『いにしへの香り 古典にみる「にほひ」の世界』淡交社 2012年
- 5) 岩崎常正『本草図譜』本草図譜刊行会